

(日琉) 方言研究のおもしろさ

ローレンス・ウエイン (オークランド大学)

ローレンスです。日琉、日本語と琉球語、の方言研究のおもしろさについて話すつもりですが、その前にさきほどご紹介にありましたように、私はサバティカルで日本に、沖縄の方に半年間来ています。7月から年末まで琉球大学に客員研究員として身を置いています。

このサバティカルというのは、私の大学では6年間勤めれば1年間有給休暇を取れます。3年間勤めれば半年間取れます。この制度、いつなくなるかわからないから、私はいつも3年間ごとに半年の有給休暇を取っています。研究をするための休暇ですから、皆様ご存じの3K、教育、研究、会議のうちの教育と会議はなくて、研究だけをしていけばいいのです。そのかわり帰国して職に復帰したら、報告書を出して、どういう研究をしたか、どういう出版物が見込めるかを出さなければなりません。次回申請するときは、前回どういう研究成果が出たかを見られて、出してもらえるかどうかそれがそれにかかります。

本題に入る前に、どういうことを今回、日本でやっているのかを例を挙げながら、ちょっと説明したいと思います。二つの例を挙げます。一つは成功した例で、もう一つは成功しなかった例で、つい最近のもので。

2週間ほど前に、富山大学で国語学会がありました。国語学会は、いつも土日にあって、その前日の金曜日に必ず日本方言研究会があります。ですから、木曜日、沖縄から富山に飛んで行って、金土日と学会に出て、月曜日はレンタカーを借りて、自動車で能登半島の方に行きました。なぜ能登半島の方に行ったかと言いますと、方言語彙集の『石川県魚類方言集』によると、能登半島の2カ所、宇出津というところと珠洲というところでは、「サヨリ」という魚のことを「スズ」と言うを書いてあるからです。沖縄では、「ダツ」という魚、サヨリに似たような長くて細い、見るからには危なそうな魚を「シジ」とか「シジャー」と言います。沖縄本島の西側に、伊江島という島があって、伊江島方言では、「スイズィ」と言います。「スイ」というのは、歴史的には「ス」から来ていますから、「スイズィ」という発音であるから、これは歴史的には「スズ」という発音から来た単語だということがわかります。

インターネットで「スズ、サヨリ、スズ、ダツ」を検索したら、この能登半島では「サヨリ」のことは「スズ」と言い、長崎県下では「テンジクダツ」という魚は「スズ」と言って、そして和歌山や大阪も「サヨリ」のことを「スズ」という方言形で言うことがわかりました。

私はもともとアクセント、すなわち「アメ (雨)」か「アメ (飴)」、そういう意味のアクセント、声の調子が専門ですから、本土 — 沖縄では内地と言うのですが — 本土日本語のそういう方言の「スズ」のアクセントが、沖縄の「シジ」とか「シジャー」のアクセントに合うかどうかを調べるために、能登半島の方に行きました。宇出津に寄って、魚の名称ですから港に行って、港で魚釣りをやっている60歳ぐらいの方に、「すみませんが一つ聞いていいですか。『サヨリ』という魚はこちらのことばでは『スズ』と言いますか？」と聞いたら、「ううん、言わない。『ムスズ』と言う」という返事でした。

確かに、石川県の魚類方言集には、宇出津のところに「スズ、ムスズ、サヨリ」と書いてありました。

「じゃ、『スズ』は聞いたことありますか?」、「ううん、聞いたことはない」と言われました。だから、すぐ車に乗って、次の珠洲という町まで行って、また港に行って、やっぱり60歳ぐらいの男の人が、海水をバケツで汲んでたんですよ。で、「『サヨリ』は何と言うんですか?」と聞いたら、「『スズ』と言います」という返事でした。これは成功した例ですね。その単語がすぐ出てきて、アクセントも「ス↓ズ」。このアクセントは沖縄の方言のアクセントと矛盾しないアクセントです。

ついでに言いますと、何で海水を汲んでいるのかと聞いたら、これは柿の渋抜きをするためだということでした。渋をとるんだったら酒につけるという方法は知っていましたが、能登半島の方では、海水に二十日間ぐらいつけて渋抜きをするようです。

その翌日、沖縄に帰りました。そしてついこの前の日曜日、また方言研究で山形県の酒田市 — 日本海側の海に近い港町ですが — に行きました。



これは酒田市の駅前にある看板です。今回は、サヨリではなくて、「崖」あるいは「土手」という意味の「ママ」という単語のアクセントを調べに行きました。これはなかなか古い単語で、万葉集にも出てくる単語で、東日本方言にしかない単語のようです。そのアクセントは、ちょっと聞いたかったので、全国方言辞典を見ると、岩手県とか秋田県とか長野県、山形県とか書いてあるのですが、長野県とか岩手県の場合は何々郡とまで書いてあるのに、山形県の場合は山形県とだけ書いてあったから、じゃ山形県では結構広く使われているのかなと思いました。でも、山形市だとアクセントがない方言になります。すなわち「アメ（雨）」と言っても、「アメ（飴）」と言っても区別はありません。ですが、庄内地方 — 酒田は庄内地方にあるのですが — はアクセントがある地方ですから、ここに行けばこの「ママ」のアクセントが聞けるかなと思ったのです。

電車に乗っているいろんなところで聞いて回ったのですが、代表的なやりとりはこういうものでした。

「方言を聞いて回っているんですが、一つ聞いていいですか?」

「ああ、いいですよ。」

「『崖、土手』という意味で、こちらの言葉で『ママ』という言葉は聞いたことありますか?」

「ああ、『ママ』は使いますよ。」

「そうですか。それはどういう意味ですか？」

「ご飯。」

結局は、ここでは探していた「ママ」は見つかりませんでした。で、山口に来る前の日に、特急で新潟南部の上越市に行きました。『新潟県方言辞典 上越編』というのがある、その中に「ママ」が載っています。「ママ： 崖、急傾斜の地、上越市上正善寺」とあります。上正善寺という集落ではこの「ママ」が使われているということがわかりましたから、上越市まで特急で行って、車を借りて、上越市から30分ぐらいのところにあるのですが、その上正善寺へ行きました。天気はすごくよくて、ちょっと町を歩いて、外で大根を洗ったり、ちょっとした作業をしたりしている人に聞いてみました。もうお年寄りしか住んでいないようなところでした。みんな80歳ぐらいの方でしたが、聞いてもわからない、聞いたことがないと言うのですよ。

この方言辞典が出たのは40年ぐらい前です。ですから、40年のうちにこの単語が消えたというふうに考えられるかもしれません。ですが、その方言辞典を書いた人は、たぶん何十年も単語を集めてその方言辞典を出版したと思いますから、その方言辞典を書いた人は1970年代より20年ぐらい前に80歳ぐらいのおばあさん、あるいはおじいさんからその単語を聞いて、そのおじいさんとおばあさんは、その当時はもう使ってなくて、子供のころには聞いたというような単語だったかもしれません。ですから、今の80歳ぐらいのお年寄りの2世代前の方は、もうその方言を使っていなかった可能性があります。私はニュージーランドから来てこの単語を調べているのですから、これは「ママを訪ねて三千里」ということになるかもしれません。

私が主に方言を調べているのは琉球諸島の方言で、これは宮古島のすぐ隣にある伊良部島の佐良浜というところにある大きな看板です。



この中の「チャイルドシート」はわかると思います。あと「命」もわかりますね。「アタラス ヤラビヌ 命 チャイルドシートシー 助キトゥサディ」とあって、意味は左側の青の字になっているのですが、これは全然日本語じゃないように見えます。「アタラス」というのは「あたらしい」ですが、現代日本語の「新しい」という意味じゃなくて、古文の「あたらし」にむしろ近いです。ここでは「かわいい」という意味です。ちょっと古文の「あたらし」から意味がずれているのですが、「アタラス ヤラビ」、これは「かわいい子供、大切な子供」です。「ヤラビ」は「童」。琉球の方言では「エ」が「イ」に変わりますから「ワラベ」が「ワラビ」になって、こちらの南琉球、宮古、八重山の方言では、この単語は「ヤラビ」になります。また、「オ」が「ウ」に変わりますから、「ヌ」は「ノ」で、「ワラビヌ命」は「童の命」です。

それから、「チャイルドシートシー」の「シー」は「で」という意味です、「ペンで書く」、「バスで行く」のような「で」です。「助キ」は「助け」。「トゥラサディ」の「トゥラサ」というのは、「とらせる、とらす」、すなわち「あげる」ということですね。で、「トラサディ」というのは古文の「とらさむ」、すなわち「とらそう」ということです。「行こう」は、沖縄の方言では「イカ」ということになります。「イカディ」の「ディ」は助詞で、「イカディ」は「行こうよ」。古文では「行かむ」です。で、「む」が落ちて「イカ」。ですから、「助キトゥラサディ」は「助けてあげようよ」という感じの表現になります。

この同じ看板の裏に、「50万円パラディナー？ 飲酒運転」。



「パラ」というのは、同じ「～しよう」の形で、「イカ」が「行こう」ということですから、「パラ」というのは、「払おう、払いましょう」ということになります。宮古や八重山地方では、日本語のハ行が古い発音のパ行として残っています。「パラディ」の「ディ」はさきほどの助詞で、「ナー」は疑問。「払う用意があるの？」という感じになるのかな。

今日は、時間があれば、次の4つの題について話したいと思います。

- ① 「カヤ」という語形について
- ② A_接ハB-Bスル という文型について
- ③ *iraku「乾く」という動詞について
- ④ -たい(希求) < 痛い?

一つ目は「カヤ」という単語、一つの名詞について。2番目は、「AハB - Bスル」という構文について。3番目は琉球方言と関係ないのですが、山口の方だったらこの「イラク」という動詞は日常的に使うかもしれません。「イラク」という動詞についてちょっと見てみたいと思います。そして、4番目に「行きたい、食べたい」の「たい」の文法的な要素について話したいと思います。

では、「カヤ」という言葉、これは琉球方言にある程度見られる単語です。

*kaya

| | |
|-----|---------------------------|
| 与那国 | kaya「肩」 |
| 新城 | kaya「腕の下はく部、手首、関節」 |
| 古見 | kaya「肘から手首までの間」 |
| 鳩間 | kaya「肩の病気」 |
| 黒島 | tii-nu haya「手首」 |
| 大浜 | kaya「肩」 |
| 石垣 | kaya「手首、手足の甲、足首」 |
| | tii-nu kaya「仕事で手首が痛くなること」 |

ここに挙げている方言は、みんな八重山の方言です。八重山のほとんどの方言にこの「カヤ」という単語があるのですが、場所によって意味に結構ばらつきがあります。与那国では「肩」を指します。鳩間では「肩の病気」、すなわち体の部位ではなくて、病気を指します。黒島では体の部位ですが、「ティーヌハヤ」、これは「手のカヤ」ですね、「手首」のことです。石垣では、四つの意味が挙がっていますが、

これは人によって違います。ある話者は「手首」だと言います。ある話者は「手足の甲」、ある話者は「足首」。話者によって意味が随分違います。その理由は、八重山ではこの単語は今ほとんど使われていないことにあります。使われてないから、こういう単語はあったけど、どういう意味だったか忘れかけています。与那国では、「肩」という普通の単語になっているのですが、ほかの八重山の方言ではほとんど使われていない言葉になっています。で、体のどこかの関節、あるいは病気、肩の病気、あるいは手首が痛くなること、という意味になります。

後で地図を見せますが、八重山より北に上ると今度は宮古になります。

宮古各地

kaya 「神経痛。農耕作業などによる過労からくる
後遺症や捻挫などの後遺症」

沖縄・奄美地方

伊江島 haya 「腱鞘炎」

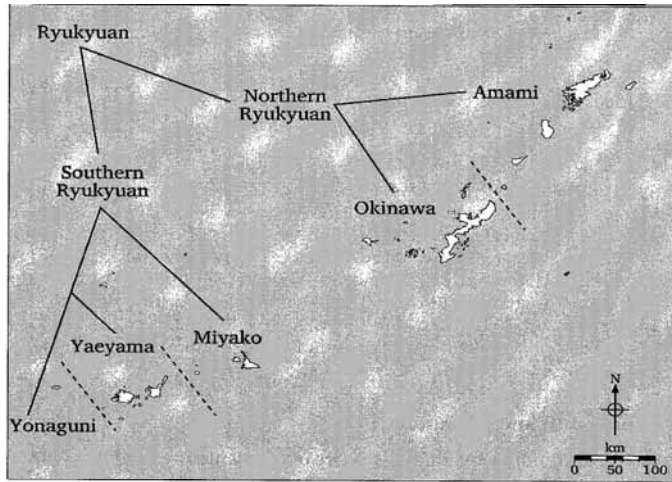
伊計島 kaya 「夜になると体の節々が痛む病気」

奄美大島佐仁 cēpusē-gaya 「膝の神経痛」

宮古では、「カヤ」は日常的に使われる単語になっています。これは、宮古の方言をしゃべる人ならだれでも知っている言葉。宮古の方言集なら、必ず載っている単語です。「神経痛」という意味です。農作業などによる過労から来る後遺症や捻挫などの後遺症という意味で使います。

より北に上ると、今度は沖縄本島、そして鹿児島県に入ると奄美地方になりますが、沖縄・奄美地方では、この3カ所だけ「カヤ」が使われているようです。伊江島、これは沖縄本島のちょっと西の方にある島ですが、ここの「ハヤ」は「腱鞘炎」。やっぱり何かの病気ですね。そして、沖縄本島のちょっと東の方の島、伊計島では「カヤ」は「夜になると体の節々が痛む病気」です。そして、奄美大島の佐仁集落では、「カヤ」だけでは使いませんが、「ツプスガヤ」というのがあって、「ツプス」というのは「膝」のことですから、「膝の神経痛」という意味になります。やはりこの「カヤ」というものは「関節痛、神経痛」を意味することがわかります。

琉球諸方言における kaya の分布



こちらが琉球列島の地図ですが、奄美地方、奄美方言はこのあたり、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島、そして奄美大島の左肩に喜界島があつて、ここの方言は奄美方言です。沖縄方言と言いますと、これは沖縄県全体の方言ではなくて、沖縄本島とその周りの島々の方言です。そして、南には先島方言、あるいは南琉球方言、があつて、宮古方言と八重山方言、この二つを合わせると先島方言になります。最西端の島、与那国の方言もその中の一つ。で、方言と関係ないのですが、石垣島の真北あたりに今話題になっている尖閣諸島があります。人が住んでいないから方言はありません。

さきほどの沖縄、奄美の「カヤ」の例ですが、伊江島は沖縄本島の西に、伊計島は沖縄本島の東に、そして佐仁集落は奄美大島の一番北の集落です。ですから、この北琉球地方の周辺のなところに「カヤ」が残っています。南琉球になると、宮古地方ではごく普通の単語として使われているのですが、八重山では消えようとしています。

日本本土における kaya の分布 (1)

- 愛媛県大三島肥海方言

カヤガ タタン 「(病中病後の人または老人・けが人の) 脚腰がたたない」

- 山口県祝島

フカヤ 「筋肉痛」
(足のフ = 脹脛)

実は、この「カヤ」という単語は、本土日本語にもあります。愛媛県おおしまひがの大三島肥海方言では、「カヤガタタン」という言い方があります。これは病中病後の人または老人、けが人の足腰が立たなくなる。すなわち私たち — 私はもう若くないけど — 若い人については、この単語は使いません。この「カヤ」の意味は、島の人にはわかりません。でも、この「カヤガタタン」という表現の中でしか使いませんから、「カヤ」は足腰、下半身関係の意味があるということです。

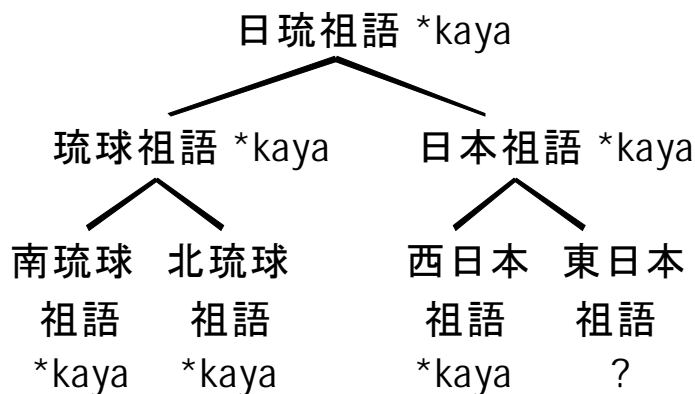
そして、山口県の祝島には「フカヤ」という単語があって、これは「筋肉痛」という意味です。例えば、運動会に出て次の日は筋肉痛があります。そのときは「フカヤ」という単語が使われます。この中の「フ」は、「ふくらはぎ」のこと。ですが「フカヤ」はどこの筋肉痛でも使います。足の筋肉痛だけじゃなくて、全身の筋肉痛について使いますが、この「フカヤ」の「フ」は、たぶんふくらはぎのことだと思います。対岸の柳井市ではふくらはぎのことは「フ」と言いますが、「フカヤ」という単語はないそうです。

日本本土における kaya の分布 (2)

「神経痛」「ロイマチス」が手に起こった場合、これを佐賀では「スローデ」というのだが、これが脚に起こった場合には、これを「カヤ」という。つまり、遠路を歩いて、そのため「ツトコブラ（ふくらはぎ）」の筋肉がかたくシコッて痛むような場合、それを、「カヤノ サガッタ」というのである。

『佐賀の方言 上巻』

そして、佐賀方言では、足の場合は、ふくらはぎの筋肉がかたくシコッて痛むような場合、それを「カヤノサガッタ」と言うという報告があります。



西日本では、ところどころこの「カヤ」という下半身関係の筋肉痛、あるいは病気を意味する語形があります。これは琉球方言の「カヤ」と関係がありそうですから、家系図のように考えれば、南琉球方言の直近の共通祖語には、この「カヤ」があつて、そして、北琉球祖語にも、北琉球方言、三つの方言に「カヤ」がありますから、これは南琉球から借用された単語ではないと考えられますから、北琉球祖語にも「カヤ」があつて、そしてそれがさらにその親の言語、琉球祖語、にも「カヤ」という単語があつたと考えられます。

そして、西日本語にも九州の佐賀や鹿児島のところどころにもあります。そして、瀬戸内海の島々にもありますから、少なくとも西日本のある程度古い時代まで、この「カヤ」という単語はさかのぼります。で、琉球方言にもありますから、これはきっと日本語と琉球語の共通の祖先の言語に「カヤ」という単語があつたということになります。意味は、体のどこの痛みかはわからないけど、体のどこかの関節の痛みという意味だつたと思われまふ。

これは、「カヤ」という単語ですが、南琉球方言では結構使われますから、前から私はこの単語は知っていました。奄美大島の一番北の集落の報告書、方言語彙集を数年前にいただいて、それを見たらこの「ツプスガヤ： 膝の関節痛、神経痛」という単語が載っていたから、あれっ、南琉球方言だけじゃなくて、北琉球方言もあるから、これは琉球祖語までさかのぼるなということになったのですが、いろいろな方言辞典とか、韓国語はどうか、アイヌ語はどうかいろんな辞典を見ていたら、この瀬戸内海の大島肥海方言の大きな方言辞典がありますが、その中に見つかりました。さらに数年が経ってから佐賀方言にもあるということがわかったから、これは非常に古い単語だということになると思ひます。

ここまでは一つの単語を問題にしましたが、今度は一つの構文を取り上げたいと思ひます。沖縄県首里方言。首里というのは、今は那覇の一部になってはいますが、那覇の中心地から4キロぐらい離れた山の上、丘の上にある集落ですが、首里城が今あつて、ここは以前の首里王国の王さまが住んでいた集落です。ですから、首里方言と言へば、以前は沖縄の標準語でした。今、沖縄の方言的な標準語は、首里言葉か那覇言葉か、あるいは芝居言葉か、ちょっとした論争があるんですが、昔の標準語は首里方言でした。

A_接ハB-Bスル

沖縄県首里方言

タッチェー イーイー ッシ、マチカンティアー ソーン

「立つては座り、立つては座り、まちかねている。」

ストウミティカラ アッタブイ ッシ、フテー ハリハリ

ソーイビータン

「朝からスコールで、降つては止み、降つては止み

していました。」

「立っては座り、立っては座り、待ちかねている」というのは、「タッチェーイーイーッシ、マチカンティーン」で、この「立っては座り、立っては座り」あるいは「立っては座り、座っては立ち」と言ってもいいのですが、その意味で、すなわち二つの動作を交互に何回も繰り返す意味で、琉球の方言では、「タッチェーイーイーッシ」のように言います。「タッチェー」というのは「立っては」ということで、助詞の「は」は「ア」になって、「立って」は「タッチ」で、「タチア」は「タッチェー」になっています。「イーイーッシ」の「イー」というのは「座る」ということ。また古文になりますが、古文では、「人がいる」というのは「いる」ではなくて、「人あり」になりますね。古文の「いる」というのは「座る」、あるいは「落ちつく」という意味ですから、これは古文の意味そのもの、そのままになっています。すなわち、これは、「立っては座り座りして」。「マチカンティーン」というのは「待ちかねて」。「ソーン」は「している」で、意味は「シオル」に相当するもので、形は「シオリオリ」に相当します。

下の例も同じです。これはインターネットから拾ったもので、「朝からスコールで、降ってはやみ、降ってはやみしていました」。首里方言の話者に方言に直してもらったら、「ストゥミティカラアッタブイッシ、フテーハリハリソーイビータン」になりました。「ストゥミティ」は、古文の「つとめて」、「冬はつとめて」の「つとめて」だから、「早朝 一朝」です。「アッタブイッシ」の「アッタ」は、山口で使うかどうかはわかりませんが、九州とかあと八丈島にもありますが、「急に」という意味です。「アッタヤミ」というのは「急な病気」。「アッタブイ」は「急な降り」で、すなわち「スコール」のことです。そして、「フテー」は「降っては」、「ハリハリ」は「晴れ晴れ」、天气が「晴れる」ことです。「降っては晴れ晴れ」。「ソーイビータン」の「ソーイ」は「している」の連用形で、「ビーン」は「ます」という意味で、古文の「はべり」からきています。「タン」は古文の「たり」に対応します。全部あわせると「降っては止み止みしていました」になります。

この構文を、私は「AハB - B構文」と呼びます。日本語の場合は、「AハB、AハB」、そして「AハB、BハA」の「降っては止み、止んでは降り」も使います。「AハB - B構文」は琉球方言、奄美大島から与那国まで全方言でごく普通に使われています。いろいろな録音資料とか、民話資料とかを読んで、たくさん例を集めました。探しているうちに、こういう例はいっぱい見つけたのですが、日本語的な「AハB、AハB」の構文は一つも見つかりませんでした。すなわち、琉球方言では、「立っては座り、立っては座り」と言わないで、「立っては座り座り」というふうに言います。

日本語にも、琉球語に対しての日本語で、日本本土語にも、実はこの「AハB - B構文」があります。1900年から1930年代までの小説などには、かなりよく出てきます。特に泉鏡花の小説にはよく出てくる構文です。

現代日本語における「A_接ハB-Bスル」構文

- 菊池寛訳『小公女』「15. 魔法」(1927)
セエラは少し登っては休み休みしました。
- 立川談志ひとり会 (1999年10月12日)
「投手は広島(カープ)の長谷川良平、これで決まり」、
沢村も金田も米田も村山もない。捕手から球が返って
くりやキャッチボールの如く、すぐ投げる。千切っ
ては投げ投げ、そのシュートボールの切れのよさ、
何せ長谷川とタイガースの渡辺昭三が投げ合うと試
合は一時間チョイで終わったことがある。

ここに挙げた例は、菊池寛の日本語訳の『小公女』にあるものです。これはもともと英語で書かれた本ですが、菊池寛の訳には、「セーラは少し登っては休み休みしました」と書いてあります。もとの英語は、こういうふうには書いていないです。「AハB - B」とかになっていません。これは、菊池寛が自分の日本語的な表現に直して、こういうふうにしたのです。

今は、こういう構文は全く使われていないようです。うちの家内は奈良の人で、ちょっと使ってみたら、「それは日本語じゃない」とか、「そういうふうには言えない」とか、『食っちゃ寝、食っちゃ寝』という意味で、『食っては寝、寝した』とか言うと、それは日本語じゃない、ダメ」だとか言われるんですが、最近の例で一つ見つかりました。今は亡き立川談志ですが、

投手は広島長の長谷川良平、これで決まり。沢村も金田も米田も村山もない。捕手から球が返ってくりゃ、キャッチボールのごとくすぐ投げる。ちぎっては投げ投げ、そのシュートボールの切れのよさ。何せ長谷川とタイガースの渡辺昭三が投げ合うと、試合は1時間ちょいで終わったことがある。「ちぎっては投げ投げ」というふうに言っています。「ちぎっては投げ、ちぎっては投げ」というと、普通は柔道を思い起こすと思いますが、この場合はボールをとって「ちぎっては投げ、ちぎっては投げ」ということだと思えます。「AハB - B構文」の最近の例です。この構文は日本語のどの文法書にも載っていません。

古い例として「かげろふ日記」、900年代ですね、10世紀、『源氏物語』よりちょっと古い時代のもんですが、この例があります。

「A_接ハB-Bスル」構文の早い例

三月つこもりかたにかりのこのみゆるをこれをと
をつゝかさぬるわさをいかてせんとしてゝまさくり
にすゝしのいとをなかうむすひてひとつむすひ
てハゆひゆひしてひきたてたれハいとようかさ
なりたり

『かげろふ日記』 卷一 四十四丁表

現代語に直すと次のようになります。

「旧暦の3月の末ごろに卵を見たので、これを10個重ねる作業をどうにかしたいと手慰みに、『すすしのいと』（これは一種の絹の糸）を長く結んで、1個の卵を結んでは結び結いして、結んでは結い、結んでは結い、10個やって、卵を10個重ねて、引き起こすととてもよく重なっている」。

この古い古文にもこの構文がありますから、これもさきほどの考え方でいくと、琉球方言にもありますし、そして古い日本語にもあるから、これは、その両言語の祖語の時代、日琉祖語にさかのぼる古い構文ではないかということが考えられます。

次の「イラク」、これは琉球語と関係ないのですが、これは去年の12月に日本で調査をした単語で、アクセントにちょっと問題がある単語です。

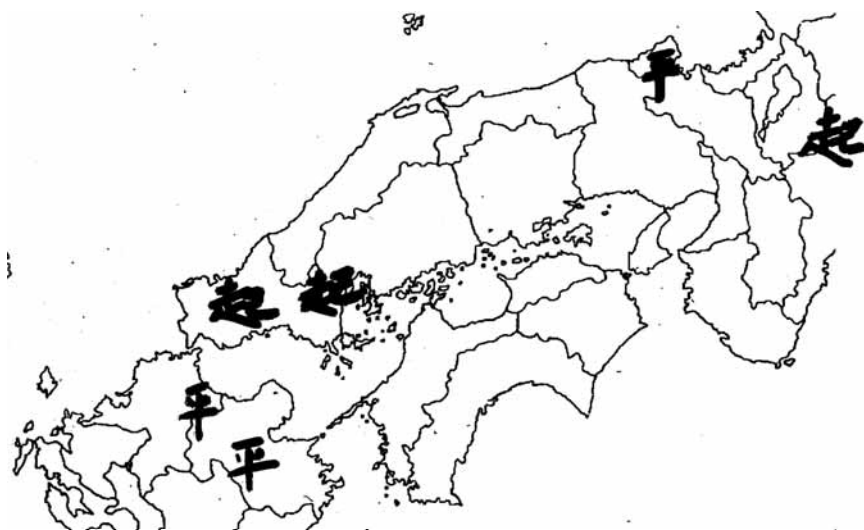
*iraku「乾く」のアクセントは？

- 大分県中津、野津町、日田
イロク（平板アクセント）
- 山口県下関、徳地町、長門湯本、祝島
イラク（起伏ア）
- 広島県芸北、芸西
イラク（起伏ア）
- 京都府竹野郡網野、伊根町
イララク（平板ア）
- 岐阜県旧徳山村戸入、旧坂内村川上、広瀬、坂本
イヤク（起伏ア）

ここの野津と徳地以外の地点は調査しました。九州では「イロク」になるのですが、九州では、この「イロク」は「乾く」という意味で、「イロク」という動詞は、主に大分県と熊本県で使われています。宮崎県の一番北の方にも「イロク」という動詞があります。

九州では、これは「イロク」と平板なアクセントになります。山口県に入ると、「イラク」と起伏アクセント、すなわち平板じゃないアクセント、になります。広島県の山口に近いところでも「イラク」になります。もっと東の方に行くと、その単語は消えてなくなります。広島市では使われません。そして、京都府の竹野郡、これは丹後地方、京都市より北、日本海に近いところですが、ここの言葉遣いは京都弁ですが、アクセントは東京アクセントになっているところでは「イララク」と平板アクセントになります。そして、さらに東に行くと岐阜県の旧徳山村戸入になります。この村にはダムができて、もう湖の下に沈んでいるのですが、その戸入に住んでいた人が、みんな一緒に別のところに移住していますから、そこに行ってちょっと調査したら、「イヤク」と起伏アクセントでした。

iraku「乾く」のアクセント分布



アクセントは、こういう分布になります。平板アクセントの「イロク」と「イララク」。そして、山口県とか岐阜県は、「イラク」か「イヤク」になります。この分布は問題です。もし、岐阜県の例がなかったら、平板アクセントをAにして、起伏アクセントをBにしたら、これは $A \rightarrow B \rightarrow A$ の分布になって、この分布は説明できます。すなわち、昔は全部平板アクセントだったのですが、山口県あたりで変化が起こって、「イラク」が「イラク」に変わって、それが少しずつ広がったが、まだ九州とか京都の方までは広がっていないというふうに考えられます。そのために、このABA分布ができた。平板アクセントの方が古くて、起伏アクセントが新しいということになります。ですが、ABAB分布になると、このようないい説明がありません。

ですから、これからもうちょっと調べなければならないのです。どう説明すればいいかわかりません。というのは、この間に、この単語が存在しないようだから。京都府北部からトンネルを抜けると豊岡、城崎、兵庫県の北方に、このあたりになるのですが、こちらではこの単語は使われていません。アクセントは問題として残ります。

この「イラク」という単語は、これは私の推測ですが、「はしゃぐ」というような、子供がはしゃいだりとかするんですが、その「はしゃぐ」の中に含まれているのではないかと思います。今の標準語では、「はしゃぐ」は体で喜びを表す意味でしか使いませんが、明治時代の東京語ではそうではありませんでした。明治時代の和英辞典、ヘボンの和英辞典にはhashaguという単語があって、「乾燥する」という意味で載っています。すなわち「はしゃぐ」の古い意味は「乾燥する」。それが変化してこの「手足、体で喜びを表す」という意味になるのですが、「はしゃぐ」の古い意味は「乾燥する」で、これは「ハシ+イラク」から来ているのではないかと考えられます。

「はしゃぐ」の古い形が「はっしゃぐ」、それより古い形は「はしらぐ」ということは、いろいろな方言を見ればわかります。

はしゃぐ = *pasi- + イラク「乾く」?

はしゃぐ < はっしゃぐ < はしらぐ

青森市 hasinaŋu 「乾きすぎてカサカサになる」

八戸市 hasiraŋu 同上

八丈島 haŋagu 「からからに乾く」

兵庫県加古川 haŋaŋu 「乾燥しすぎてひび割れる」

高知県諸地点 haŋiraŋu 「乾燥する」

例えば、八戸市では「はすらぐ」、「はしらぐ」ですね。「はすらぐ」というのは「乾き過ぎてかさかさになる」とか、西日本の高知県の方では、同じ「はしらぐ」というのがあって、「乾燥する」の意味です。兵庫県加古川は「はっしゃぐ」になります。「はしらぐ」が「はっしゃぐ」になって、そして「はしゃぐ」になるというふう考えられます。

さきほど言ったように、「はしゃぐ」はもともと「乾燥する」。たぶんこの単語を日常的に使う人はいます。山口の方は地点によって使い方が微妙に違うのですが、ただの乾燥するのじゃなくて、もう水分が完全に消えて、さっきの例では「かさかさする」とか、木でできた桶でしたら、その板が曲がってしまうとか、田んぼだったら土にひびが入る、そのような乾き方です。方言によっては、「唇がいらく」と言える方言と言えない方言とがあります。ある方言では、「喉がいらく」と言えるけど、ほかの方言では言えない。「布団をいろかす」のように言える方言と言えない方言とありますが、基本的には田んぼとか道路とか地面について言う場合に使うようです。

その「からからに乾燥する」意味の単語が、方々で「はしゃぐ」という意味、「体をもって喜びを表す」意味に変化しているようですね。

「はしゃぐ」の意味変化の問題点

ハシラグ(鳥取県河原) = さわぐ, ふざける
(<http://homepage3.nifty.com/kakibaru/cyukyu4/togoyuru.htm>)

ハシラグ(高知県諸地点) = 陽気に騒ぐ

イラク(京都府網野) = よく乾く。子供の悦び
さわぐこと。『丹後網野の方言』 p.77

東京語では、明治時代にその変化が起こったようです。「ハシラグ」は西日本でも東日本でもその変化が起こっています。「ハシラグ」じゃなくて、「イラク」系の「イララク」の場合でも、京都府の網野では、「よく乾く」の意味だけじゃなくて、「子供の悦び騒ぐこと」の意味で使われています。「はしゃぐ」「ハシラグ」が同じその変化を起こして、「イララク」も場所によってはその同じ変化を起こしています。これは少なくとも2回起こっている変化です。「ハシラグ」のときにも起こっていますし、また「イララク」のときにも起こっています。

日本語の古典語に「戯る^さ」という動詞があって、下二段活用ですから現代語に直接直せば「される」という単語になりますが、これが後で「じゃれる」という動詞になるのです。「ネコジャラシ」とかのその「じゃれる」ですね。これは、一つの意味は、「はしゃぐ」という意味ですが、もともとの意味は、「天日や風雨にさらしてそのものがもろくなって崩れる」です。風雨は乾かないですが、「天日にさらしてからからになって、もろくなって崩れる」という意味もあったのですね。「風雨とか天日にさらす。さらしてそのものがもろくなる」という意味があります。

ですから、もともとの意味は、「乾き切って、あるいは濡れてもろくなって崩れる、だめになる」という意味が、どういうわけか「じゃれる、さわぐ、はしゃぐ」という意味に変化しています。この方の変化を入れると、少なくとも3回同じ変化が日本の各地点で起こっていることになります。どうやら、これは起こりやすい変化のようですが、私にはその意味的な関係ははっきりと理解できていません。

ある人は、田んぼが乾ききって地面にひびが入って、こういうふう^にに上向きに曲がる。これを、子供たちとかが手を挙げて喜びを表す形と結びつけようとしているのですが、ちょっと私にはよくわかりません。

ですが、事実としてこの変化は何回も日本語の中で起こっていますから、ほかの言語を見て探したら、同じ変化があるはずですよ。これが自然な変化だったら、「乾く、乾き切る」という意味の単語が「はしゃぐ」という意味を持つようになるはずですよ。これからそういう方面でちょっと調べようと思っています。

で、はしゃぐは、「ハシ」プラス「イラク」だという可能性をさっき言ったのですが、この「ハシ」とは何のことでしょうか。

*pasi- ?

- パシパシ 「堅くて乾燥していること」
『宇和島の方言』 p.54
- ハシヤバシヤ (長野県)
「この下着、はしゃばしゃして気持ちいいなあ」
(この下着、よく乾いてさっぱりして気持ちいいなあ)
『都道府県別全国方言小事典』 p.72

四国の宇和島方言では、「パシパシ」というのがあって、これは「堅くて乾燥していること」。あるいは、長野県では「ハシバシヤ」というのが、「この下着、はしゃばしゃして気持ちいいなあ」「よく乾いてさっぱりして気持ちいいなあ」の意味です。ですから、この「パシ」「ハシ」というのは、「乾燥している」とか、「堅くて乾燥している」という意味を持った擬態語的な要素じゃないかと思います。

「はしゃぐ」は、この「ハシ」プラス「イラク」から来ているのではないかと私は見っていますが、問題が幾つかあります。

はしゃぐ = *pasi- + イラク「乾く」?

- ハシラグ はあるが、ハシラク は?
- 東日本に「イラク」は存在するか?
- はしゃぐ・はしらぐ のアクセントは pasi- が決定しているか?
- 「からからに乾燥する」 > 「活発に騒ぎ回る」の意味変化は何回も起こるものだろうか?

それだったら、「ハシラク」になるはずですが、どうして「ハシラグ」になるのか? そして、「イラク」というのは西日本にしかありません。岐阜県には入っているのですが、それより東からは報告されていないのですが、それはどうしてか? 「ハシラグ」「はしゃぐ」は、どちらかという東日本の言葉、高知とかにもありますが、東日本の方が強いです。アクセントの問題もありますが、一番大きい問題は、その意味変化。これは何回も起こるものでしょうか?

最後に見てみたい「たい」は、「食べたい、飲みたい、書きたい」の「たい」です。これは、普通、「痛い」と関係があると言われていました。古文辞典を見ると、これは「いたい」が動詞にくっついたとか書いてあるものがあります。「書きたい」というのは「書く+いたい」。

で、「痛い」が「甚だ」という意味になって、そして「希望」を表すようになったというふうに説明されるのです。実は「痛い」が「甚だ」になるという意味変化、これはよくある意味変化です。「いたく懐かしい」とか言いますよね。

④ -たい (希求) < 痛い?

痛い > 甚だ > 希望

古文だったら「いとをかし」があります。この「いと」は「いたく」のウ音便形に由来しています。英語でも、「痛い」という意味の形容詞でsoreというのがありますが、それを副詞にしてsorelyにすると、「甚だ」という意味になります。

「たくさん飲む」の意味の「痛飲する」は「痛くなるまで飲む」ということじゃなくて、「甚だ多く飲む」ということです。ですから、「いたい」が「甚だ」になる変化は、これは自然な変化だと言えます。問題は、この「甚だ」から「したい、欲求、希望」になる段階ですが、これはほかの言語を見ても、なかなか出てきません。すなわち、ほかの言語を見ると、「したい」— 英語のwantとか — のもとの意味は、「甚だ」ではなくて、普通は別の方向から来ているようです。

実は沖縄の方言にこれと関連するおもしろい資料があります。

-たい(希求)

沖縄県八重山群島鳩間島方言

pari-pus-an 「行きたい」 ffai-pus-an 「食べたい」
numi-pus-an 「飲みたい」 pooki-pus-an 「掃きたい」

sibaru si-cca-an 「小便したい」
ssu mari-cca-an 「大便したい」
paki-cca-an 「吐きたい」
pana pusi-cca-an 「嚏したい」

これは沖縄の八重山方言の一つである鳩間島方言ですが、基本的には「何かをしたい」というのは「何かほしい」というふうに言います。ですから、「飲みたい」というのは「ヌミプサン」で、「ヌミ」というのは「飲み」、「プス」というのは「ほしい」の語幹、「アン」というのは、琉球方言の形容詞はみな「アン」で終わりますけれども、歴史的にはこれは「あり、ある」から来ていますが、形容詞の語尾だと考えればいいです。「飲みほしい」ということですね。古い日本語では、「まほしい」というのがあって、「飲みたし」があらわれる前は「飲ままほし」だったのですが、その「ほし」です。で、「食べたい」は「ツファイプサン」。「ツファイ」というのは「食らう」から来ています。「掃きたい」— 箒で掃きたいとか — は「ハウキプサン」。普通の「何々したい」というのは、「ホシ」系の語尾を使います。

ですが、いくつかの表現には、「イタイ」系の語尾を使います。例えば「小便したい」は「シバルシツァーン」。「シ」は「する」。「シバル」というのは古文の「いばり」「ゆばり」と関係がある単語。語頭のsはちょっとどこから来たかわからないのですが、古文では「ゆばり」「いばい」というのは「おしっこ」のこと。で、「シ」は「する」。「ツツァ」というのは「たい」。次の例の「ツス」は「糞」。「ツスマリツァーン」とか、「吐きたい」の「パキツァーン」とか、「くしゃみしたい」の「パナプシツァーン」とか、「眠りたい」の「ニンビツァーン」とかがありますが、これはみんな生理的な現象で、自

分の意味ではコントロールできないものです。そういうときは、「イタ」系の語尾を使います。「ホシ」を使いません。

今のは八重山方言の例でしたが、多くの琉球の方言は、「ホシ」系を使うか「イタ」系を使うかどっちか一方だけを使います。鳩間は基本的には「ホシ」系を使って、わずかにこの「イタ」系があります。

何百キロも離れた沖縄本島のこれは大宜味村津波方言で同じような現象があります。

沖縄県 沖縄本島 大宜味村津波方言

?iki-ba-haN 「(名護に) 行きたい」

sii-ba-haN 「したい」

misii-ba-haN 「見せたい」

?iki-cja-haN 「(トイレに) 行きたい」

suubee sii-cja-haN 「小便したい」

niNbi-cja-haN 「眠りたい」

「名護という町に行きたい」の時の「行きたい」は、「イキバハン」です。「イキブハン」になるはずですが、この方言ではちょっと不規則的に「ブ」が「バ」に変わっているのですが、これは同じ「ホシ」から来ています。s が h に変わっています。「イキバハン」とか「シイバハン」とか「ミシバハン」を使います。名護に行きたい場合は「イキバハン」ですが、トイレに行きたい場合は「イキチャハン」と言います。「行きたい」から来ています。で、「小便したい」「眠りたい」の場合に「イタ」系の語尾を使うのは、遠く離れた鳩間方言と全く同じ使い分けなのです。これは偶然ではないでしょう。古い状態がこの二つの方言に残っていると考えられます。

痛い > 甚だ > ~~希望~~
V
痛烈な感じ
V
生理的必要性
V
感情的必要性
V
希望

今までの説は「痛い」 > 「甚だ」 > 「希望」という変化過程を想定していたのですが、これじゃなくて、この「いたい」が本当の「痛い」じゃなくて、まずは痛烈な感じを表すようになったでしょう、「しっこしたい」と言うときは、「体が痛くなるほどしっこしたい」という意味になったのでしょう。そして、それが生理的必然性を表すようになった — 鳩間方言がこの段階になっていると考えられます。

「眠りたい」とか「吐きたい」とか「しっこしたい」というのは、本当は希望じゃないですね。「希望」という単語は使っちゃいけないと思います。「必要性」です。その次に、「感情的必要性」を表すようになります。

例は挙げなかったのですが、鳩間方言と同じ八重山方言で、近い方言に黒島方言というのがあります。地理的には近くないのですが、方言的には、言語的には近い方言です。その黒島方言では、やっぱり「ホシ」系の語尾をよく使いますが、「タイ」系の語尾も鳩間方言よりは使います。例えば「石垣に行きたい」と言うときは、「ホシ」系を使っても「タイ」系を使っても両方使えます。ただし、ニュアンスが違います。「何かを買いたいから石垣に行きたい」、そういうときは「ホシ」系を使いますが、「行かなければならない」というほどの強い意味になると「ホシ」じゃなくて、「タイ」系を使います。「行かなければならない」という意味ですから、必要性になります。ですから、もともとの生理的必要性が弱くなって、生理的な問題じゃなくて、感情的な問題になります。それで「タイ」の使用領域が広がって、いろいろな動詞に付くようになって、最終的には欲求、希望を表すようになったと考えられます。こちらの方は変化の段階は多いのですが、自然に何で「イタイ」という悪い意味の形容詞が「希望」という意味の助動詞に変化、発展できたかは説明できるとおもいます。日本本土の方言だけを見ていたらわかりません。日本本土はどこへ行っても「タイ」しかありません。古文の「まほし」はもうどこの方言にも残っていません。

最後に、宮古方言の文章です。

kunu panassu kskii fiisamai, pukurassa

(宮古方言)

「クヌパナッスキ_スキーフィーサマイ プクラッサ」です。「お」が「う」になりますから、「クヌ」というのは「この」です。「パナッス」、宮古方言では「イ」が z になります。で、この z は母音のように無声化します。標準語の「話し」の最後の i が無声化して、それと同じように宮古方言では「イ」から来た z が s に無声化することになりますから、「ハナシ」というのは「パナ_ス」になります。宮古の一番大きい町は平良ひららですが、それがピ_スララになって、そして s の後の r が s に変わって、「ピ_スサラ」になります。「平良」は宮古方言では「ピ_スサラ」と発音します。「パナッス」の終わりの「う」母音は助詞の「を」です。子音の後に母音で始まる助詞を付けると、その子音がダブって「パナッス」ができます。「この話をキ_スキー」と続きますが、ここの _ス (s) は「イ」から来たものですから、「ズ」になって無声化しています。これは「聞き」で、「聞いて」という意味です。宮古方言は「て」という活用語尾はありません。「聞いて、炊いて、もんで」はありません。「キ_スキー」は「聞きおり」から来た形でしょう。次は「フィーサマイ」で、「サマイ」は動詞に付く語尾で、その語源はわかりません、宮古方言にしかなく

て。語源はわかりませんが、尊敬語を作る語尾です。「フィー」というのは「くれ」から来ています。「くれる」という意味ですから、「くれる」の尊敬語ですから、「くださって」になります。「プクラッサ」、「プカラッ」というのは、「誇らしい」から来ていますが、すなわち「ありがたい」ということです。宮古方言では「ありがとう」のことを「プクラッサ」と言います。すなわち、「ご清聴、ありがとうございます」になります。